

日本を愛したヒロ　ジョセフ・ヒロ

この物語の主人公は浜田彦藏といいます。

瀬戸内海に面した播磨国加古郡古富（現在の播磨町）の農家に一八三七（天保八）年に生まれました。幼いころに父を、十三才の時に母を亡くしました。

母が死んだその年の秋、彦藏は栄力丸という船に乗り江戸に向かっていました。ところが江戸からの帰路、紀伊半島の大王崎のあたりにあって船は難破、五十二日もの間、ひょう流しました。幸い、南鳥島の近くでアメリカの商船オークランド号に救助されました。そして、助けられた船員とともに、彦藏はサンフランシスコへ向かったのです。

彦藏がアメリカに着いたのは、ペリーの黒船が浦賀おきに姿を現す前々年の一八五一（嘉永四）年。日本は世界の国々から開国をせまられていきました。しかし、鎖国は続き、キリスト教も厳しく禁止している状きょうでした。外国へ行くことも許されず、ひょう流して外国からもどつた者は厳しく取り調べられ、かん視されるところの中でした。まだまだ、世界からは孤立した島国だったのです。

彦藏はとうとうサンフランシスコで、日本では尋ねてもよばないような文明の進歩を目の当たりにします。

「これは、わいらの國とはえらいちがいや。」

レンガ造りのがんじょうな建物、たくさんの商品が並ぶ店、町を歩く人々の姿、なにもかもが彦藏にとっておどろきで、まるでりゅう宮城に連れてこられたような気分でした。

翌年、彦藏にアメリカのはからいで日本に帰る機会が訪れ、香港まで船で向かいました。ペリーの黒船に乗って日本に帰国する予定だったのです。ところが、その船がなかなかやつてきません。そのうち、自分がアメリカに、日本との外交交渉の材料に使われるのではないかという疑念をいただきます。彦藏は帰国を取りやめ、アメリカに引き返したのです。

再びサンフランシスコで暮らしていた彦藏は、ニューヨークに移り住みます。一八五三（嘉永六）年、日本人として初めてアメリカ大統領に面会しました。翌年、知り合った人々の好意でボルティモアのミッション・スクールに入学し、教育を受けます。その後、キリスト教の洗礼を受け、ジョセフ・ヒロと名前を改めました。

一八五八（安政五）年、アメリカと日本との間で修好通商条約が結ばれました。日本とアメリカとの関係を知ったヒロは、日本へ帰りたいという思いが再びわき上がってきました。

しかし、キリスト教徒となつた自分が、キリスト教を禁じている日本へもどることなどできないうことは、だれよりもかれ自身が知っていました。ヒロはアメリカ国民となつて生きる道を選び、帰化しました。ジョセフ・ヒロ、二十才のときでした。

とはいっても、日本が自分の故国であることに変わりはありません。望郷への思いは、それからもつのるばかりでした。アメリカ人となり、ジョセフ・ヒロと名前が変わつても「日本人の心」が消え失せるなど、ありはしませんでした。

そのヒコに思ひがけない知らせが入ります。日本に派けんされている公使ハリスが、ヒコを神奈川領事館の通訳として採用するというのです。ヒコは長崎を経由して神奈川にふ任しました。九年ぶりに故国の土をふんだのです。

しかし、久しぶりに見た日本の社会ヒコせおじいさまでした。

「外国の進歩に比べて、これはなんや。」Jの国は世界から取り残されてしまつや。」

開国とは名ばかりで、人々の暮らしへは以前のままでした。そればかりか、外国人に対する暴行がひんぱんに起きていました。外国人を見たら殺害しようとたくらむ者も、たくさんいました。アメリカ人となり領事館で働くヒコも他人事ではありません。我が身に危害が加えられる可能性があります。身の危険を感じながら、日本を察する日が続きました。しかし、世は幕末の尊王攘夷の機運が高まる中、いよいよ身に危険がせまつ、ヒコは日本をはなれる決心をします。

「きつとまた、こじにもじつてくる……。」

アメリカ国民のヒコにとって日本は異国でした。しかし、次第に小さくなる日本の岸を船上から見つめ、「Jの国をなんとかしなくてはならない……」といつ、あせりにも似た強い思いが胸のおくからつ上げてくるのを、ヒコはおわべることができませんでした。

アメリカにもひつたヒコは、あの日本のなげかわしい状きょうが脳裏からはなれません。このままでは、日本は世界からどんどん廃放されていく。戦争でも仕かけられたら大変なことになるだろ。人も國も、日本のすべてが田喰めなくてはいけない。そう思つヒコでした。

帰国の翌年、ヒコはリンカーン大統領と会見する機会にめぐまれました。日本では、しょ民が將軍と面会することなど考えられません。

すでにヒコが会つた大統領は、リンカーンで三人目でした。

「Jとある」と日本とのちがいを思い知らされるヒコは、考きました。

「どうすれば日本は生まれ変わるだろうか。何が、日本を変えるきつかけになるのだろうか。」アメリカについても、やはつヒコは、故國日本の行く末に大きな不安をいだき続けていたのです。そんなる日、町で新聞売りを見かけました。

ヒコは早速その新聞を一部買い求め、読んでみました。リンカーン大統領の演説も記事になっています。人々はそれを食い入るようにして読んでいます。

「これだ！」

それは、だれもが世の中の出来事を知ることができる社会の光景でした。これこそが日本を眞めさせる「何か」ではないか。

ヒコは、ひらめき、しばらくな間、新聞を読みふける人々の姿に見入っていました。

リンカーンに会つたその年、再び日本へ行く機会がやつてきました。ヒコは、今度こそ故国の役に立つことをしようど、強く心に決め、再び領事館にふ任しました。

しかし、ヒコが目にした日本では、イギリス人が殺害されたり、外国の商船がほづげきされたりと、相変わらず混乱が続いていました。以前と同じように、自分の身が危険にさらされる」と

もたびたびありました、しかし、今度は簡単にアメリカにもどるわけにはいきません。ヒコには心に秘めたある決意があつたからです。

「アメリカの出来事や、世界の動きを正確に日本人たちに伝えなければ、この国はだめになってしまいます。伝えることができるのは、異国で暮らしてきた私しかいない。」

その思いを胸にいだいていたヒコは、一年後、領事館通訳を辞め、外国人居留地でアメリカやイギリスのニュースを記事にした新聞の発行に向けて活動を始めました。

しかし、アメリカで教育を受けたヒコは、日本語を話すことができても、日本語の文章を書くことが苦手でした。どうしたらよいかと思案しているところへ、ヒコが語る言葉を文章にするという協力者が現れました。ヒコのもとで英語を学んでいた岸田吟香たちです。ヒコは、岸田らの協力を得て、外国新聞をほん訳する「海外新聞」を創刊しました。

「これで、日本人は異国の出来事を知り、そして、きっと目覚めるはずだ。」

ヒコはでき上がった新聞を、感がい深く見つめていました。

一八六四（元治元）年六月。ヒコが手にしたその新聞は、定期的に発行された日本最初の新聞でした。

最初の二三つ読者はたつたの四人でした。それでもヒコは、海外のニュースやめずらしい出来事を記事にして無料で配りました。「海外新聞」は筆写され、たくさんの人たちの手にわたるようになりました。ヒコは、新聞の発行が人々の考え方に入りきょうをおよぼす手応えを感じていました。これは、世の中を変える大きなきつかけになると、改めて強く感じました。

「きっと、日本は変わるにちがいない。」

新聞を読む人たちの姿が、アメリカの街角で見たあの日の光景と重なり、ヒコの全身に熱いものがこみ上げてくるのでした。

一八六八年、ヒコは十八年ぶりに故郷の播磨にもどりました。明治元年のことでした。

ヒコはその後も日本に残り、アメリカでの経験を生かして、新しい社会づくりにつかんする仕事を続けました。

だれよりも「日本人の心」をもち続けたアメリカ人、ジョセフ・ヒコは、一八九七（明治三十）

年、東京の自宅で亡くなりました。

今は、東京青山の外国人墓地で永いねむりについています。